

## 三月の生活訓練

附屬幼稚園

小島 その

三月の訓練について記すやうにさいふこまになつたが、生活訓練については先年倉橋先生に、本誌上で保育案解説の折御教へをいたゞいた事であるし、又三月であるから特別にこれだけの訓練をせねばならぬさいふ事があるわけもない様に考へるので、たゞ子供さしよにゐて何さなく感じた事の二、三を年少年長に分けて記してみる。

年少組幼稚園の生活にもすつかりなれきつた頃で、年少組としての一番おしまひの月を迎へたのである。この一年間に子供達はいつのまにかいろくよい習慣がつけられて來たのである。しかし生活訓練は幼児の一人一人へのことであるから、それくその都度怠りなく指導して行かねばならない。今頃になつても未だ登園の時間がおそい子供があるたら、その子供は毎日毎日他の子供と較べてぎんなに氣の毒なこゝであらう。これは子供でなく家庭の方へ注意せねばならぬ事である。作業中の姿勢についても今迄怠りなく注意されて來た事であるが、これは作業に熱中するこ

兎角亂れがちでなかくなほりにくいものである、一人一人によく注意を要する。席も光線を背に負ふ様な位置にならぬ様にしなければならぬ。繪本その他遊び道具の取扱ひについてもこのごろになつたら正しい取扱ひが出来る様心がけてやり度いものである。私達の小さい頃は、繪本ばかりでなく、字のかいてあるものは、みんな小さな紙きれでも、非常に大切なもので特別なものゝ様に考へ、決してその邊に亂雑におくべきものではないと自然に教へられて來たものである。そのころに較べて今はこの種のものゝ數が多くなつて來たためか何さなく軽くさりあつかはれてゐる様な氣がする、本をみる時は正しい態度で見ること、又大切に扱ふ様に、後は必ず所定の場所に靜かに眞直に置くやうによく注意してやり度い。こうして書きたてることゝ大それた固苦しくなるが、本を出して來た一人の子供のミこころへ行つて、そつミ云へばよいことである。遊び道具も同じことである。例へばまゝミ道具の様な數人でしよに遊ぶものでも、繩ミびの様な一人で用ひるものでも、その時は大それた要求してゐても他の遊びに移つてしまつた時は、全く忘れられてしまふ、出して遊ぶ時にいらなくなつたら又こゝに持つて來ませうねミ一寸注意してあたへるのミ、だまつて手渡すのミ、何でもない事の様だがそこに違ひが生ずる様に思はれる。食事の時の作法はもう相當正しく行は

れてゐるはずであるが、このころは遊びに夢中になり食事中も午前の遊びのつゞきで一ぱい、食事もそこそこに片づけ仕事にしてしまふ子供がよくあるころである。食事は、はじめからおしまひまで正しくし度いものである。お茶碗にごはんつぶを残さぬこまなぎは當然すぎる位當然のこまであるが、小さい頃から、かくあるべきものこいふこまを、いつまなく習慣づけたいものである。歸りの整容についても相當に自分の手で出来る様になつてよい頃である。いくら元氣一ぱいに遊んでも、落つくべき時には落つける様な子供になつてゐなくてはならない。歸りの仕度はひさりひさりによく先生の方で注意を要することである。

年長組幼稚園生活のもうおしまひの月が来たのである。このころになれば、いつかしらのうちに、この年齢相應のよい習慣がすっかりついてゐるはずである。しかし小學校入學を目の前に控へてゐるので、あれもこれもさ、いろいろな事が目につく、そうかゞ云つて急に小學校式になるこまはよくない。組全體が一しよに行動をする様な場合に、他の人にかけてはなれて一しよに出来ない子供があるなら特に注意したい。食事の時や、歸りの時なぎ、何度も催促しなければなかく仕度の出来ない子供がある。こまにこのころは夢中に遊び出すこまなかくこれらの仕度は揃はないものである、食事ですよ云ふ前に、特にその子供には

そつ云つてきかせ度い。皆を待たせるこまのよくないこま、皆が同じに出来るのにそれが出来ないこまのはづかしこまを。よく分る様に話してきかせて、その度毎に注意をくりかへしくはげましながらなをしてゆき度いものである。結果があらはれてから注意するこまは親切でない。結果が出る前に一寸注意したいものである。食事の時にしても、こぼしてしまつてから、「そんなにこぼしたの、さあおひろひなさい」云つてみたり、食事が終つてお盆を元の位置にかへす時、がたん、亂暴においたのをみてから「さあも一度靜かに置きなほし」云つたりしても何にもならない。よくこぼす子供にはいたゞきはじめに一寸注意し、又亂暴な片づけ方をする子供には、その子がごはんがすみそうになつた時、さあお盆は靜かにおきませうねなご一言云ふのこまはないのこまではそこに大した差が出来る。作業中は、このころは大そう仕事に熱中するために、やゝもすれば姿勢もくづれ、用ひる道具の類も亂雑になりがちである。正しい姿勢で、道具もきちんと順序よく、机の上を整頓してする仕事の心持のよさを味はせてやり度いと思ふ。何しろほんたうに残り少ないこの最後の生活を、訓練してくらすばかりでなく、充分にたのしませ、又共にたのしみたいものである。